OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Ahmet kitab)ı okuyor kal)ın.'はなぜ非文法的なのか : Word Grammar におけるトルコ語の語順の説明
Author(s)	吉村, 大樹
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2010, 4, p. 79-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9816
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

‘*Ahmet kitabı okuyor kalın.’ はなぜ非文法的なのか
—Word Grammar におけるトルコ語の語順の説明—

吉 村 大 樹*
YOSHIMURA Taiki

Abstract：

Why Is **Ahmet kitabı okuyor kalın* Ungrammatical? :
How Best to Explain Word Order in Turkish in the Framework of Word Grammar

In this article, I will argue that the explanation for continuity of word order provided by Word Grammar (WG), where there are four main syntactic principles, namely, (i) Parent Valency (i.e. every word has only one word from which it takes its position), (ii) Sentence-root Principle, which guarantees that there must be only one word which has no syntactic parent in that clause, (iii) No-tangling Principle, which requires dependency arrows not to be tangled, and (iv) Raising Principle, i.e. only syntactic relation that includes landmark relation (in other words, the relation between a word to be located and the word from which it takes its position) remains to be at surface dependency structure. The analysis employing these principles is superior to the previous version of WG, mainly using ‘Landmark Transitivity’, the principle that makes phrases hang together and ‘Raising Principle’ mentioned above in [Hudson 2007]. Both approaches are based on general cognition which speakers of any language are assumed to have and successfully explain why discontinuous word order is not allowed in virtually any language including English and Turkish, but the most recent approach proposed in [Hudson to appear in 2010] is better than the previous one in that it analyses examples in Turkish easily.

Keywords：Turkish, Word Grammar, syntactic dependency, discontinuity, landmark relation
キーワード：トルコ語，Word Grammar，統語的依存関係，不連続構成素，ランドマーク

１．導入

現代トルコ語（以下，トルコ語）はしばしば「語順の自由な言語」であると言われるこ

＊　大阪大学世界言語研究センター・特任助教授／京都府立大学文学部・共同研究員

とがあるが，このような説明は不正確とは言えないにせよ，少なくとも「言語に内在的な語順の規則に反しない限り」という但し書きを必要とする。つまり，トルコ語は完全な意味で「語順自由言語」とは言えない。その根拠として，一つには発話時の文脈によっては特定の語順が機能上の観点から許容されないということが挙げられるし［Erguvanlı 1984］，もう一つの根拠として，おそらくほとんど全ての言語で見られる，統語的関係を有するが連続しない語同士の配列（または構成素）は排除されるという現象がトルコ語にも見られるということを挙げることができる。たとえば（1）の各例の比較から，限定形容詞は主要語である名詞と連続して生起する必要がある（別の言い方をすれば，名詞句は内心構造を有していなければならない）ことがわかる。（1a）が文法的に問題ないのに対して，（1b）（1c）では，いずれも限定形容詞 kalın が主要語である名詞と正しい語順関係を有していないために非文と判断される。

（1） a. Ahmet　kalın　kitab-ı　oku-yor.
　　Ahmet-主格　厚い　本-対格　読む-進行：３単
　　「アフメトは（その）厚い本を読んでいる」
　b. *Ahmet　kitab-ı　oku-yor　kalın.
　　Ahmet-主格　本-対格　読む-進行：３単　厚い
　c. *Ahmet　kalın　oku-yor　kitab-ı.
　　Ahmet-主格　厚い　読む-進行：３単　本-対格

分析の対象となる言語，理論的枠組みの如何を問わず，２つ以上の語が組み合わさっていわゆる構成素を形成するとき，その統語的配列（つまり構成素内部の語順）は連続的でなければならないことを説明する必要がある。実際，現在互いに競合する様々な言語理論，あるいは文法理論が，この不連続構成素の完全な説明を目指して発展してきたと言っても過言ではない。

言語理論ごとに連続性をどのように排除するかはそれぞれ異なるであろうし，それらの優劣を比較・検討することは重要であるが，本稿ではそのための準備段階として，言語の個別性を超えた一般的な問題として統語論の対象となっている語順の問題について，トルコ語を対象としつつ論じることを第一の目的とする。具体的には，不連続構成素が文法的に適格でないことを，近年大きく枠組みを変えた Word Grammar（以下，WG と略記する）の立場でどのように説明されるのかを明らかにし，この新しい枠組みがトルコ語の説明にどのように適用できるのかを明らかにしたい。この枠組みでは，ランドマークという概念を用いた，人間の一般的認知能力に基づくいくつかの原理を複合的に適用するが，その説明は先に［Hudson 2007］で提示された「ランドマーク他動律」（Landmark Transitivity）という概念よりも，新たに［Hudson to appear in 2010］で導入された「依存関係の交差禁止原理」（No-tangling Principle）を中心とする原理を用いる。このことにより，語順の連続性を簡潔に表示することができる。

本稿での議論に関する WG の主な特徴は，概略以下のようにまとめることができる。

- 人間の言語知識を，無数の概念が様々な関係性に基づいて網の目のようにつながったネットワークのようなものであると仮定している。
- 特に統語構造については，語同士の依存関係に基づいて構造の説明がなされる，いわゆる依存文法の一種として知られているが，これは２つの語が直接的に主語や目的語などといった，何らかの関係により関連づけられるということを意味する。
- 言語に関する知識だけでなく，それ以外の人間のもつ知識それ自体が様々な概念によって形成されたネットワークとなっていると説明される。したがって，言語構造の説明と一般的知識構造の説明は並行的であるべきと仮定されている。
- ある事物が知識の中でどのカテゴリーに属するかを説明するのに，多くの認知言語学の枠組みで採用されている，いわゆるプロトタイプ理論を採用している。また，カテゴリーの分類の論理として特質継承（Default Inheritance）という考え方を用いる。

これらの諸特徴のうち，特に本稿では語同士の依存関係という概念が最も重要なものである。以下，この依存関係を用いた語順の説明が，トルコ語にどのように適用されるかを見ていきたい。[1]

２．Landmark Transitivity［Hudson 2007］による語順の説明とその課題

（１）ランドマーク，ランドマーク他動律

WG は［Hudson 2007］で New Word Grammar と名付けられ，それまでの理論的枠組みとはいくつかの点で異なることが強調されている。このうち統語論に関して言えば，語順の問題は語同士の位置関係を認知する能力に基づいて説明すること，また語順の連続性を，やはり各語どうしの位置関係に基づいて説明しようとしたことは大きな変更点であるといえるだろう。この位置関係を，WG では「ランドマーク」（landmark）と言う概念を用いて説明しようとしている。

ランドマークは「ボールは箱の中にある」というときのボールの位置と箱との位置関係，あるいは「学校に行く前に雨が降った」というときの「学校に行く」という事象と「雨が降る」という事象の時間の前後関係など，非言語的知識においても重要な役割を果たすと考えられる空間的・時間的位置をあらわす概念であるが，WG ではこのランドマークという認識能力が語順の判断にも反映されていると考える。一般に単語が２つ存在し，この２語が統語的に依存関係をもっているとき，依存語の語順を決定する（つまり，ランドマークとなる）のは主要語のほうであると考えることができる。good books という２語を例にとるならば，good は常に books の前に来ないといけないが，これは good のランドマークが books である，と言い換えられる。このような説明の前提として，通例ある語の

1　最近の WG のより詳細な理論的枠組みについては［Hudson 2007］，［Hudson to appear in 2010］を参照されたい。

ランドマークは，その語の主要語（parent）である，ということを確認しておきたい［Hudson 2007:132］。[2] 言い方を変えれば，自らが統語的に支配する語を前後どちらに要求するかは，主要語が依存語に対して有する特性の一つである，ということもできる。

さて［Hudson 2007］では，このランドマークという概念を用いて，語順の連続性について一般化を行った。具体的には，下の（2b）は文法的に全く問題のない文であるが，（2c）は語順が不適切であるという理由により，英語としては不適格な構造である。この説明には，（2a）のような状況での各事物の位置関係の認知能力と平行的であると WG では考えている。

(2) a. The circle is to the left of the diamond which is to the right side of the square.
b. Read good books.
A C B
c. *Good read books.

まず，（2a）の例の意図について説明しておきたい。この例文では，円が三角形（ここでは diamond）の左に位置し，また三角形は正方形（square）の右にあると述べられているが，Hudson 自身の直感では，下図 1 の左図のように円（circle）は正方形（square）の後ろにあるべきであり，図 1 右図のように円が正方形の前にあるという解釈は奇妙である［Hudson 2007: 135］。つまり，円と正方形の位置関係は，正方形と三角形との相対的な位置関係と同じであるべきだということであり，図 1 右図の解釈が奇妙に思われるのは，円と正方形の位置関係が適切でない（または，円と三角形との位置関係が連続的でない）からである。

図 1

このことを踏まえて，（2b）（2c）の例で，便宜的に A が read, B が books, そして C が good であるとし，これらの前後関係（つまり，ランドマーク関係）について考察してみよう。C は B をランドマークとし（つまり C は B に対して常に前に来ないといけない），B は A をランドマークとしている（つまり B は A に対して常に後ろに来ないといけない）。

2 このことは，‘Parents are landmarks: a word’s parent is its landmark.’と明記されている［Hudson 2007: 132］。

このとき，「語順一致の原理」により，C の A に対する関係は，B と A の前後関係（B が常に A の後ろにある）と同じく，C が常に A に対して後ろでなければならない。このことを WG の枠組みで示したのが図１であるが，ランドマークそれ自体は主語関係，目的語関係などといった統語的依存関係とは本質的に異なる概念であるため，ここでは点線の曲線の矢印で表示する。図６の左図が示すように，C と A の相対的な位置が適切な（2a）は語順一致の原理に反しないが，右図では（2b）が C と A の位置関係（‘C is before A’，つまり C は A に対して before の関係を有している）が A と B の位置関係（‘B is after A，つまり B は A に対して‘after’の関係にある）と一致していないので語順の不適格性が予測できる，といったことが示されている。[3]

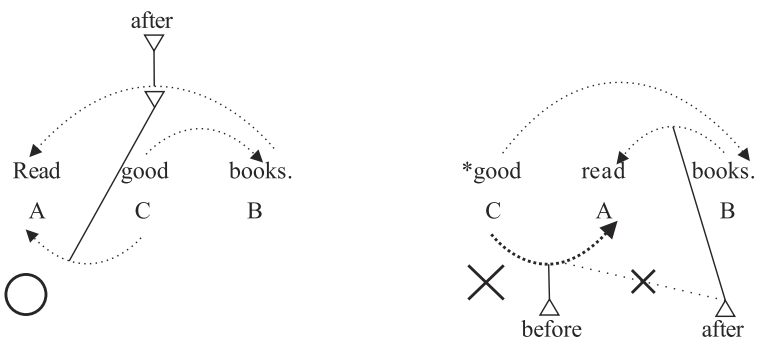


図２

また（3）は英語の例であるが，動詞の直接目的語と間接目的語の相対的位置が問題となり，（3a）のように直接目的語が間接目的語に後続する場合は問題ないが，その位置が逆転した（3b）は不適格となる。

（3） a. He gave students good marks.
b. *He gave good marks students.

［Hudson 2007: 134］

直接目的語，間接目的語のいずれも動詞に直接依存しているため，ランドマークはそれぞれ動詞であるが，同時にこれら２つの直接・間接目的語は，互いをランドマークとしていると考えると説明がつく。そこで，（3）の例の対照を WG の枠組みで説明すると，概略図３のようになる。

3 ［Hudson 2007］の段階での表記法では，統語的依存関係は実線で示される曲線の矢印を用いて表示される。ランドマークは，統語的依存関係とは関連はするが異なる概念であるので，その相違点を示すために図６のように点線による曲線の矢印で表示される。なお次章で明らかにするが，より最近の枠組みではランドマークと統語的依存関係を別の方法で表示する方法をとるため，本章で用いるような点線による曲線の矢印は不要となっている。

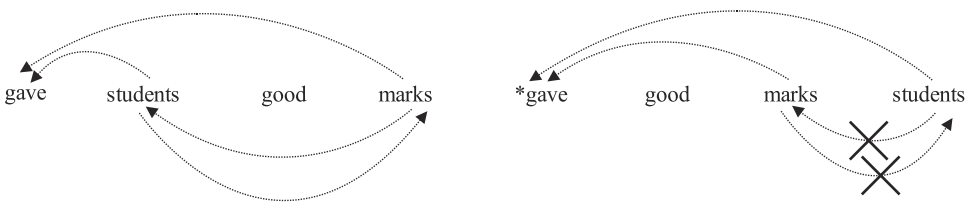


図３

以上のデータを踏まえ，WG では「ランドマーク他動律」（The landmark transitivity）という原理を採用している。この原理は（4）のように定式化できる。[4]

(4)　ランドマーク他動律[5]
ある語 A が別の語 B にとって L という先行（あるいは後続）関係であり，さらに，(i) B が別の語 C のランドマークであれば，A は C に対しても同じ先行（あるいは後続）関係のランドマークでなければならない。
または，(ii) A が C にとってのランドマークでもあるとき（つまり，A が B と C の両方にとってのランドマークとなるとき），B は C に対して，先行・後続関係のいずれかでランドマークとなる。

このランドマークの他動律を踏まえ，本稿の冒頭で提示した非文法的な構造がどのように排除されるかを最後に確認しておきたい。すでに述べたように（1b,c）が不適格である理由は，統語的に関連する 2 語（限定形容詞 kalın と名詞 kitabı）が連続していないからである。これを今提示したランドマークの他動律の枠組みで説明するならば，限定形容詞 kalın（C）のランドマークは kitabı（B）であり，さらに kitabı（B）のランドマークは動詞 okuyor（A）であるので，kalın は kitabı と同じ位置関係を動詞に対してもっていなければならない（（1b）では先行，（1c）では後続していなければならない）が，いずれもこの他動律に違反しているため，構造が不適格であることが説明できる。以上のことを図で示したのが，図 4 である。[6]

4　または，語順一致の原理（Order Concord Principle）と呼ばれることもある［Hudson 2003］。
5　原文［Hudson 2007: 139］による Landmark Transitivity は以下のように定式化されている。
If A is a landmark, of sub-type L, for B, and:
(i) B is a landmark for C (subordinate transitivity), then A is also a type L landmark for C.
(ii) A is also a landmark for C (sister transitivity), then B is also some type of landmark for C.
6　図 4 は（1）の例文のうち，文頭の主語を省略して表示されている。

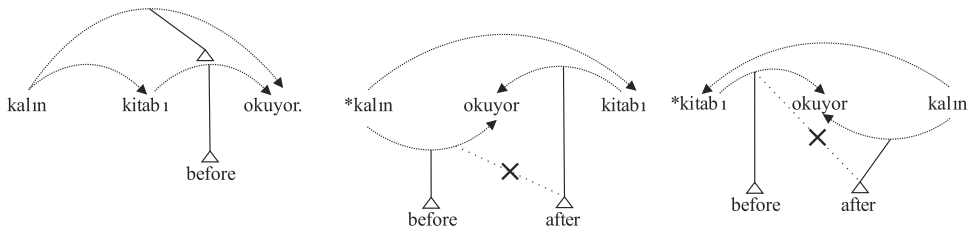


図４

（２）依存関係の上昇原理

［Hudson 2007］において，ランドマークの他動律と並んで重要な原理は，依存関係の上昇原理（Raising Principle）である。WG では，ある語が２つ以上の主要語（parent）をもつことが認められる。具体例として，以下（5）で示す英語とトルコ語の例について考えてみたい。

(5)　a. She seemed pregnant.　［Hudson 1998: 47］
　　b. Ben　yardımcı　ol-ur-um.
　　私－主格　援助者　なる－アオリスト－１単
　　「私がお手伝いします」

(5a) では，主語 she のランドマークとなりうる語が seemed と pregnant と，２つ存在する。しかし実際には，ランドマークとなる語は１つあれば十分であるし，また１つだけでなければランドマーク同士の競合が起こることになってしまい，理論的整合性が保てない可能性が生じる。そこで，seemed か pregnant のどちらが最終的に主語 she のランドマークとなることができるのかという問題が生じることになる。ここで，もし仮に pregnant が優先的に she のランドマークになるとしてしまうと，先ほど提示したランドマークの他動律に違反することになってしまう。なぜなら，she（C）のランドマークが pregnant（B）であり，pregnant のランドマークは seemed（A）であるから，ランドマークの他動律が機能すれば she は（pregnant が seemed に後続するのと同様に）seemed の後ろに生起しなければ不連続構成素が生じ，非文法的となるはずである。しかし，現実にはこの文は非文法的どころか，きわめて自然な文である。このような誤った予測を防ぐために，WG ではある語が２つ以上の主要語を有するとき，ランドマークとなるのはどちらか一つだけであり，かつそれらの主要語同士の関係について，より支配的な地位を有する（つまり，直接・間接的に統語的な主要語となっているほうの語）が，最初に言及した語のランドマークとなるという原理を立てている。したがって下の図５では，左図のようにランドマークの他動律の違反を防ぐことのできないランドマーク関係は，依存関係の上昇原理に違反するため認められず，かわりに右図のようにより上位の語がランドマークとなるような関係が認められる。

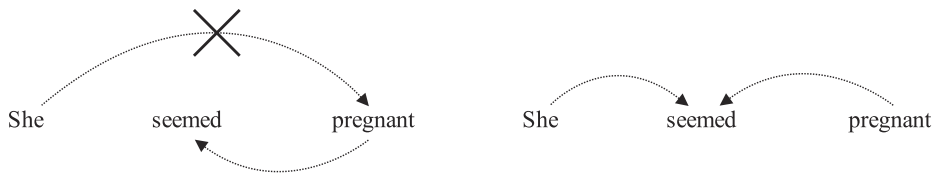


図５

この規則は，トルコ語の例（3b）にも適用可能である。（3b）は（3a）と同様に，文頭の主語代名詞 ben は名詞 yardımcı の主語であると同時に，olurum の主語でもある。つまり，英語の例（3a）と比べて各語ごとの語順の違い以外は同じ構造をしていると言える。このとき，ben のランドマークとなるのは，やはり yardımcı か olurum のどちらかであるが，最終的にランドマークとなるのは，yardımcı を統語的に支配する olurum である。[7] したがって，ben の統語的位置を決定しているのは（つまり，ランドマークは）yardımcı ではなく，olurum ということになる。以上のトルコ語のランドマーク関係も，下の図６のように説明でき，左図のように ben は olurum をランドマークにするのが正しく，右図のようなランドマーク関係は認められない。[8]

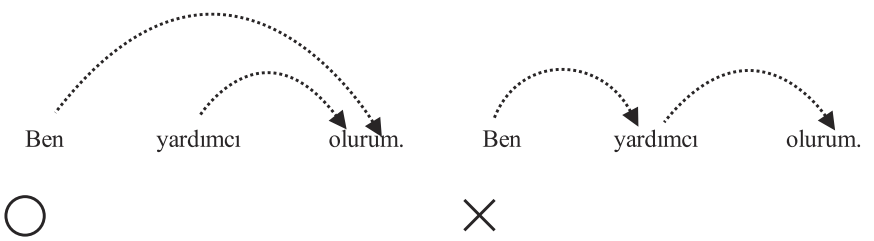


図６

7　［Hudson 2007］の段階では，（3a）の seem と pregnant の関係，および（3b）の yardımcı と olrurum のような関係は，主語を共有する「共有者」（sharer）という統語的依存関係のラベルで説明されていた。最近の枠組みではこの依存関係を「共有者」ではなく，「叙述」（predicative）関係として表示することになっている。ただし，ここでは統語関係の種類よりも，依存関係の方向とランドマーク関係に焦点を当てる目的により，これらの依存関係のラベルは筆者が意図的に省略した。

8　トルコ語の（5b）のような例に関して言えば，一見するとランドマークを与えられるのは yardımcı のほうであっても説明としては問題ないように見えるかもしれない。しかし，もし yardımcı のほうが ben にとってのランドマークであるとすると，この代名詞が述語動詞に後置されるが文法的には問題ない（i）のような例を説明する際に問題が生じる。つまり，yardımcı が olurum に先行する関係であることは変わらないので，ben も同じく olurum に先行していなければならないが，実際は後続していて，ランドマーク他動律には違反している。

(i) Yardımcı　ol-ur-um　　ben.
　援助者　　なる－アオリスト－１単　私
　「お手伝いいたしましょう，私が」

このような理論的な問題を回避するには，結局 ben は olurum をランドマークとすれば問題ない。従って，トルコ語でもやはり依存関係上昇原理は適用されると考えられる。

以上のように，ある語が２つ以上の主要語を有するとき，ランドマークはいずれか１つの語からしか与えられないとし，このことを「依存関係の上昇原理」（the Raising Principle）として理論的に保証している。この原理の定式は，（6）に示す通りである。

（6） 依存関係の上昇原理（Raising Principle）[9]
ある語が２つ以上の主要語に依存しているとき，ランドマークとなるのは，全ての語を直接・間接的に支配する（依存されている）語である。

以上の２つの原理が，［Hudson 2007］で提示された統語原理である。これらは，それまでの WG の枠組みで用いられていた「依存関係交差禁止原理」（No-tangling Principle），「懸垂禁止原理」（No-dangling Principle）を理論的に問題があるとして，発展的に解消しつつ提唱されたものでもある。ただし後述するように，これら２つの原理が最近の WG の枠組みでは再び採用されることになったのであるが，なぜこの段階で採用されなかったかという議論については次章で述べることにしたい。

（３）実用上の問題

以上の原理は統語論上の連続性を保証するものとして有効であると思われるが，一方で構文によってはやや複雑な説明を必要とすることが指摘されている。たとえば，再び英語の例を挙げるとすると，（7）のような例がどのように説明されるかが問題となるかもしれない。

（7） a. Give students of linguistics tulips.
b. *Give students tulips of linguistics.

各語の先行・後続関係は概略，以下の通りである。（i）前置詞 of は主要語である名詞 students に後続しており，（ii）直接目的語は間接目的語に後続している。したがって，やはり個々の語同士の前後関係は（7a,b）ともに問題ないが，文法性には明らかな差が出る結果となっている。これまでの説明の方法を用いるならば，（7a）はランドマークの他動律に違反していないが，（7b）は違反していなければならない。しかし，一見して（7b）は（4i）（4ii）のどちらにも違反していないように見える。そこで［Hudson 2007:140］では，（4i）（4ii）を以下（8）で示すように複合的に適用することにより，（7a）（7b）の文法性の違いを説明できるとしている。[10]

9 原文［Hudson 2007: 141］は以下の通り。‘If a word has more than one parent, then its landmark is the parent which is superordinate to all the other parents.’［Hudson 2007: 141］

10 （4）で提示した（i）のような他動律は「従属的他動律」（subordinate transitivity），（ii）のようなタイプは「姉妹的他動律（sister transitivity）」と呼ばれているが，本稿ではこれらの名称は用いないことにする。

(8) (Step 1) students, tulips ともに give に依存しているので，students, tulips のランドマークは give である。
(Step 2) このとき, students, tulips はランドマークを共有する関係（本稿でいう（4-ii）に該当する）なので，互いをランドマークとする。
(Step 3) of は students に統語的に依存するので，of のランドマークはそのまま students である。
(Step 4) Step 2 により students は tulips をランドマークとするので，また Step 3 により of は students をランドマークとするので，(4-i) により of もまた tulips をランドマークとすることができる。
(Step 5) Step 4 をより具体的に言うとすれば，of と tulips の前後関係は，students と tulips の前後関係と同じ（students は tulips に対して‘before’の関係にある）である。したがって of が tulips に先行している（つまり, before の関係である）(7a) は文法的に適格だが，前後関係が一致していない (7b) は不適格となる。

以上のことを図で示したのが，下の図 7 である。

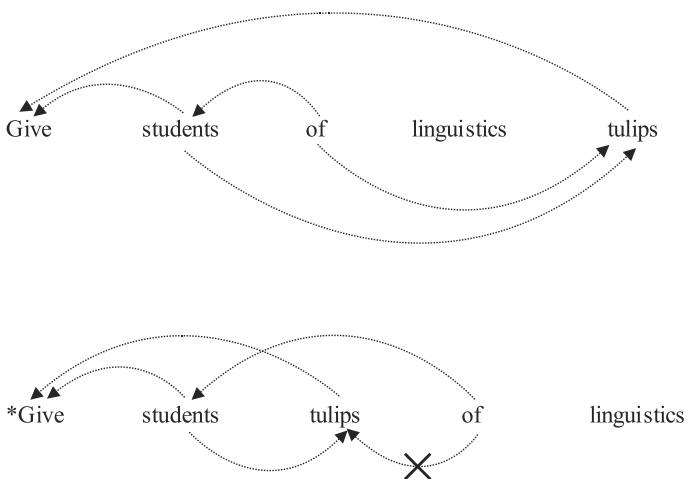


図 7

以上が，[Hudson 2007] による不連続性の排除の方法，および連続性を保証する原理の説明であった。しかし，このようなアプローチの理論上の問題点はそれほど多くないとしても，あえて課題を挙げるとすれば，その説明の複雑さにあると言えるだろう。とりわけ，最後に提示した (7) の例に対する (8) のような説明はいかにも複雑であり，この構文の説明だけでいえば, [Hudson 2007] で一旦破棄された「依存関係交差禁止原理」(The No-tangling Principle)（この原理については次章で解説する）を導入するほうが，よほど簡潔に説明ができる。

すでに述べたように，[Hudson 2007] では，それまで使用していたいくつかの統語的

原理を排除した。それにはいくつかの理由があったが，より最近提示されたWGの枠組みでは，これらの欠点が一応解消されたという理由により，再び統語原理が簡潔化している。そこで次章で，最近の枠組み［Hudson to appear in 2010］では，これまでのような例に対してどのような説明が与えられているかを説明し，その有効性について検証していくことにしたい。

３.［Hudson to appear in 2010］における語順の説明

句構造を基礎とする理論，特に変形生成文法では移動や削除，X-bar理論と言った種々の独立した規則を用いて不連続性を説明することになるであろう。これに対し，最近のWGでは極めて単純で，かつ言語話者の一般的な認知能力に基礎をおいた４つの法則で不連続構成素が排除できることを明らかにする。WGはここ数年，再びユーザー・フレンドリーな枠組みであることを目指しつつ（「依存関係交差禁止原理」の復活はまさにそれを体現している），理論的にもさらに精密化を図ろうとしている。これらの枠組みを用いた分析の利点は，他の理論と比べて規則の数それ自体が少ないこと，視覚的に不連続構成素による不適格性が明確に表示できることが挙げられる。

（１）［Hudson to appear in 2010］における統語論上の諸原理

［Hudson to appear in 2010］で導入された４つの原理とは，以下（9）で示す通りである。

(9) a. 全ての語は必ず文中で１つ別の語に依存しなければならない「主要語結合価」（Parent Valency）。
b. 全ての語を直接・間接的に支配する語はただ１つだけ存在し，その語は語用論的な文脈に依存している（「センテンス・ルート原理」（Sentence-Root Principle））。
c. 依存関係は別の依存関係と交差してはならない（No-tangling Principle）。
d. ある語の語順を決定する語（landmark）は基本的にはその語のparentであり，もしその語が２つ以上の主要語を有する場合，landmarkはそれらのうち最も高位にある（全ての語を直接・間接的に支配する）語であるとする「依存関係上昇原理」（Raising Principle）。

４つの原理のうち，（9d）に関しては基本的に前章で紹介したものと同じ内容の原理であるが，その他の枠組みの変更に伴い，その表示の方法が変化している。このことについては後述することにして，以下，各原理について順に説明していきたい。

まずすでに上で述べたことであるが，（9a）の「主要語結合価」（Parent Valency）は，すべての語は統語的に必ず別の語に依存しなくてはならないというものである。たとえば，トルコ語のgüzel（「美しい」等），bazı（「いくつかの」等）といった限定形容詞は，必ず名詞を主要語に要求するし，hemen（「すぐ」等）やbazen（「時々」等）といった副詞も，形容詞かあるいは動詞を主要語として要求する。この義務性が主要語結合価と呼ばれる原

理であるが，この原理を導入する意味は，文中においてどの語とも依存関係をもたない語がある場合，その構造は不適格と予測できることにある。具体例として，（10）の各例について考えてみたい。

（10） a. joke books
b. books of joke
c. Ben istasyon-a gid-iyor-um.
私－主格 駅－与格 行く－現在－１単
「私は駅に行く」
d. *O ben istasyon-a gid-iyor-um.
彼（彼女）－主格 私－主格 駅－与格 行く－現在－１単
「* 彼は私は駅に行く」

たとえば（10a）では，joke は books を修飾しており，この関係は依存関係の枠組みで言えば，joke は books に依存しているということになる。しかし（10b）では，books と joke の意味関係は（10a）のそれと変わらないと仮に言うことができるとしても，その統語構造は全く異なるものである（すなわち，joke は前置詞 of の補語になっている）。このとき，joke が依存している語（つまり主要語）は「主要語結合価」原理の要請により of のみであって joke と同時に依存しているとは言えない。

一方トルコ語の例に目を向けると，（10c）と比較して（10d）は，文中のどの語とも統語的関係を持てない文頭の代名詞 o が生起しているため，文全体が不適格である。以上の例から，基本的にある語の主要語は１つ（より正確にいえば，ランドマークを与えてくれる主要語は１つ）のみである，ということになる。以上のことを WG の枠組みで表示したものが，下の図８である。

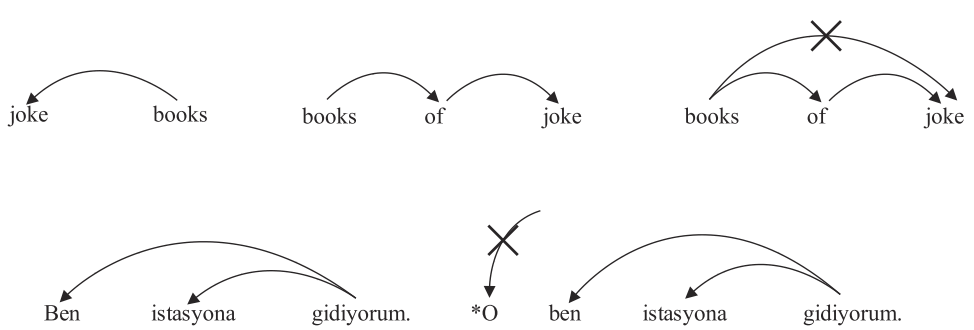


図８

次に，（9b）の「センテンス・ルート原理」について論じることにしたい。先ほど，主要語結合価原理において，すべての語が一つ主要語を有し，その語に依存していなければ

ならないと述べたが，この原理に対する明らかな例外となる語が，文には必ず１つ存在するはずである。具体例として，（11）の各例について考えてみよう。

（11） a. He is a linguist.
b. Mehmet öğrenci.
Mehmet- 主格 学生
「メフメトは学生だ」
c. Mehmet yakışıklı.
Mehmet- 主格 格好いい
「メフメトは美男子だ」
d. Bu kitap-lar öğrenci-ler için.
この 本－複数 学生－複数 ために
「これらの本は学生たちのため（のもの）だ」
e. Mehmet istasyon-a gid-iyor.
Mehmet －主格 駅－与格 行く－進行：３単
「メフメトは駅へ向かっている」

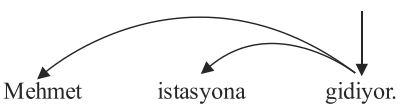
（11a）は英語の例だが，英語の場合は定形節には必ず定形動詞が一つ存在するはずであり，この定形動詞は単純節の場合は，文中の他のどの語にも依存しない語である。一方トルコ語の場合は（11b-e）の各例が示すように，動詞だけでなく名詞や形容詞，あるいは後置詞などが述語となり得るため，特定の語類に属する語がどの語にも依存しないとは言えないが，それでも各例では述語は他の語に統語的に依存しない。これらの語の理論的な地位を保証するために設定されているのが「センテンス・ルートの原理」である。別の言い方をすれば，文には必ず一つセンテンス・ルートが存在することになる。これを踏まえ，センテンス・ルートとなる語には，図９のように表記上垂直に下ろされた直線の矢印が示される。

図９

トルコ語においてセンテンス・ルートがどのように正当化されるかは議論の必要があるかもしれないが，統語的には，もしある節のセンテンス・ルートが，別の節の語に依存するような場合には，そのままその矢印が依存する語と関連付けられることで正当化できる。（12b）では（12a）の単純節のセンテンス・ルートであった gidiyor が，さらに従属接続詞 diye に依存していると考えることができるが，このことは下の図 10 のように示すこと

で容易に説明できる。

(12) a. (=11e) Mehmet istasyon-a gid-iyor.
b. Mehmet istasyon-a gid-iyor diye söyle-di.
Mehmet-主格 駅－与格 行く－進行 と 言う－過去：３単
「彼（彼女）は，メフメトが駅に行くと言った」



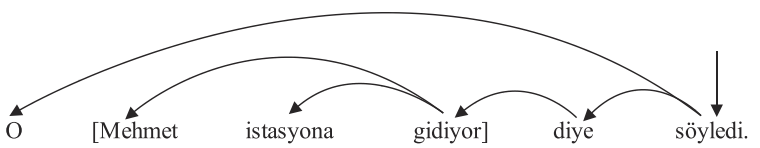


図 10

また，機能的には，述語（特に動詞）は断定・質問・命令などといった，いわゆる発語内行為（illocutionary force）が集約される語であるとみなすことができるだろう。つまり，述語それ自体が発話時の文脈や発話の目的に依存していると考えるのである。注意しておくべきことは，センテンス・ルートに下ろされる垂直の矢印は［Hudson 2007］以前に導入されていたが，純粋に統語的な概念であるかどうかが明確でないという理由により一旦破棄されたことである。このセンテンス・ルートがなぜ最近の枠組みで再び採用されることになったのかは後述する。[11]

これら２つの原理を踏まえて，より最近の WG で最も重要な統語原理は，(9c) で提示した依存関係交差禁止規則である。すでに述べたように，この原理は個々の統語関係を示した矢印は，互いに交差してはならないというものであった。この原理により，センテンス・ルートに下ろされる垂直の矢印を採用したことにより，本稿の冒頭 (1) で示したト

11 発語内行為の一つとして「質問」という行為が認められるとするならば，少なくともトルコ語においてこの発語内行為が集約される語は文の述語ではなく，kim「誰」，ne「何」などといった疑問代名詞や，疑問接語 mI「～か」などであるとする可能性も考えられるかもしれない。このように考える根拠として，トルコ語では英語で疑問文の場合主語と動詞の位置交代が起こるといったような統語的に明らかな変化が見られないことが挙げられる。しかしながら，少なくとも筆者の主張では，やはり発語内行為の集約される語は文の述語（かつ，母体節の述語）であると考えるべきである。その根拠として，一つに発話時の文脈によっては，疑問詞や疑問接語がなくとも疑問をあらわす場合があること，また疑問代名詞や疑問接語が文中に用いられるからといって，必ずしもその文全体が疑問をあらわすとは言えない例があることの２点を指摘することができる。さらに，疑問代名詞，疑問接語ともに述語を統語的に支配することはできない（特に疑問接語は，トルコ語において強い主要部後置の傾向が見られるにもかかわらず，例外的に統語的には述語に依存している。この議論については［Yoshimura to appear in 2010］を参照されたい）。

ルコ語の非文法的な例を視覚的に明瞭に説明できる。再び（1）の例に立ち戻りつつ，下の図 11 について考察したい。

（13=1）a. Ahmet　　kalın　　kitab-ı　　oku-yor.
　　Ahmet-主格　厚い　本-対格　読む-進行：３単
　　「アフメトは（その）厚い本を読んでいる」
　　b. *Ahmet　　kitab-ı　　oku-yor　　kalın.
　　Ahmet-主格　本-対格　読む-進行：３単　厚い
　　c. *Ahmet　　kalın　　oku-yor　　kitab-ı.
　　Ahmet-主格　厚い　読む-進行：３単　本-対格

図 9 と同様に，議論に必要な部分だけを統語的依存関係で説明すると，以下図 11 で示すとおりになる。

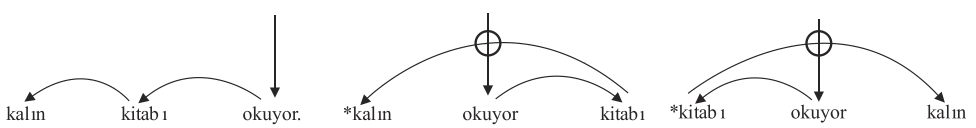


図 11

前章で提示した図 9 では，ランドマークを示す点線の矢印，および前後関係のラベルを駆使して語順の説明を行ったが，図 16 の各図は図 9 と比較してはるかに簡潔になっている。左図は（1a）の例に対応する分析で，語順上の問題が生じていないが，（1b）（1c）に対応する中央図，右図は依存関係の矢印が交差する結果となり，それぞれ構造が不適格であることが説明される。また，前出の（7）の例も，以下図 12 が示すとおり，煩雑な手順を踏むことなく，視覚的にその文法性の差異が説明できる。

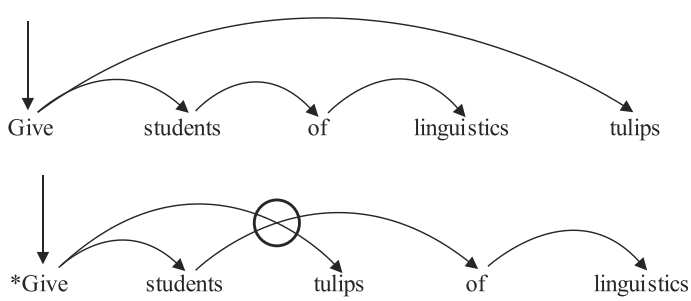


図 12

最後に，依存関係交差禁止原理の導入に伴い，すでに［Hudson 2007］で導入された依

存関係上昇原理についても説明しておく必要がある。2 章で提示した［Hudson 2007］と違い，［Hudson to appear in 2010］ではこの結果，約束事として生起位置を与えてくれる統語関係は「表層の」依存関係と認識され，表記上語の上部に曲線の矢印が描かれる。それ以外の依存関係は，下の図 13 にあるように語の下部に表示される。したがって，語の上部の依存関係は，同時に語順も説明していることになる。なお，依存関係の交差禁止原理が適用されるのは，これら上部の依存関係だけである。

ふたたび，第 2 章で提示した（5）の例に立ち戻ることにしよう。（5）では，she は seemed の主語であると同時に pregnant の主語でもあるため，she は 2 つの主要語をもつことになる。ランドマーク他動律を用いた説明では，she にとって seemed と pregnant のどちらがランドマークとなるのかということであったが，依存関係の上昇原理により seemed が she のランドマークとなる，という説明は変わらない。その代わりに，図の表示の仕方は若干変更されている。すなわち，she と seemed の統語的依存関係のほうが語順に関わる（つまり，ランドマークを与える）依存関係として文の上部に残り，she と pregnant の依存関係が文の下部で表示される。こうすることにより，依存関係は交差せず，当該の文構造が適格であることが正確に予測できる。図 13 では，言うまでもなく依存関係上昇原理の適用される左図のほうが正しい説明であり，同原理を適用しない分析である右図のような説明は許容されない。

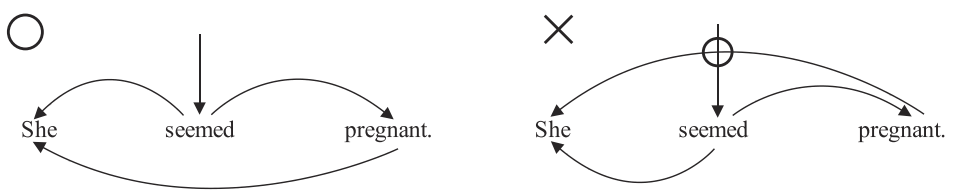


図 13

以上が，新しい WG による統語構造の連続性の説明に必要な原理である。前章で提示した［Hudson 2007］の枠組みにせよ，本章で提示した枠組みにせよ，いずれも英語だけでなくトルコ語の統語構造を説明するに耐えうることを論証してきたが，いずれの枠組みがより優れていると言えるのかについて，次節で考察してみたい。

（2）枠組みの比較

すでに前章でも触れたように，実は前節で提示した（9）の各原理は，［Hudson 2007］以前に採用され，使用されていたものであった［Hudson 1998］［Hudson 1999］が，語順一致の原理が採用された［Hudson 2007］の段階で，それぞれ一旦破棄されている。[12] その

12　ただし，前節（9a）の「主要部結合価」は，「懸垂禁止原理」（No-dangling Principle）と呼ばれていた。これらの原理を導入した詳細な議論については，［Hudson 1999］を参照されたい。

理由は，概略以下のようなものであった。まず，(i) この原理が統語論以外の言語知識のネットワークで利用できない，(ii) センテンス・ルートに下ろされる垂直の矢印が統語的なものとは言いにくいため，理論的に何らかの方法を用いて正当化することが困難であるが，この垂直の矢印がなければ *red drink wine のような文で依存関係の交差がおこらず，非文法性を説明できない，(iii) 等位接続構造に適用できない（適格文を排除してしまう）ということであった［Hudson 2007: 140］。特に等位接続構造については，以下の (14) の例を提示し，依存関係の交差による構造の排除という方法ではうまく説明できないと論じている。

(14)　I went to Edinburgh yesterday and Birmingham on Thursday.

もし依存関係の交差禁止原理を用いるならば，その分析結果は図 14 の上図のようになり，構文が文法的であるにもかかわらず依存関係が交差してしまい，正しく文法性を予測できないことになってしまう。一方，図 14 下図のようにランドマークの他動律を利用すれば，このような問題は生じない。なぜなら，この原理は語同士の前後関係のみに言及しており，正しい前後関係さえ保持していれば文法的であることを予測できるからである。

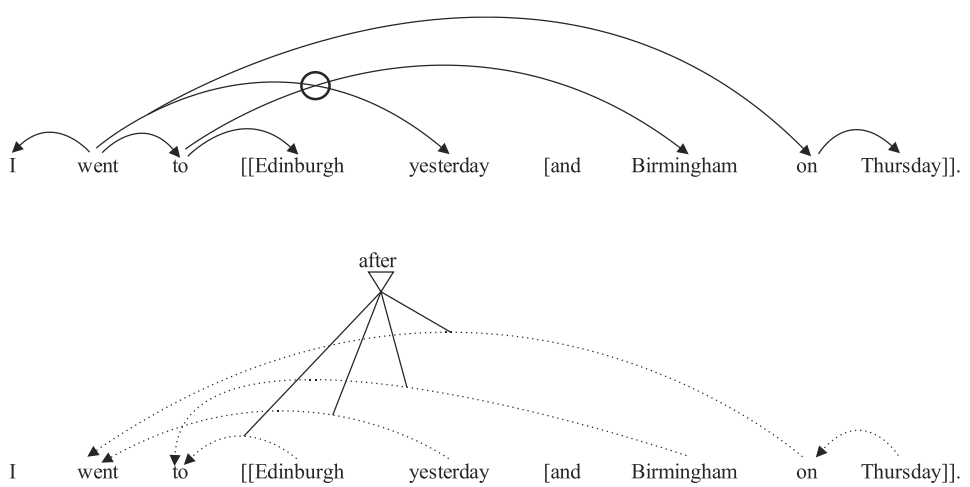


図 14

しかし上記の批判に対しては，本章で紹介した枠組みでも一応の解決策を立てている。すなわち，(i) 交差禁止原理が統語論以外の言語知識の説明に利用できないという批判に対しては，以下のように回答することができる。この原理が最初に導入された当時と異なり，最新の枠組みでは交差禁止原理はランドマーク関係にある語同士の統語的依存関係にのみ適用される。ランドマークはすでに述べたように，空間的・時間的関係を理解するための一般的認知能力であり，この批判はもはや現段階では，交差禁止原理にはあてはまら

ない。

また，(ii) のセンテンス・ルートが統語的裏付けに乏しいという批判に対しても，すでに（12）の例と図 10 で論じたように，ある節のセンテンス・ルートが，別の節の語に依存するような場合には，そのままその矢印が依存する語と関連付けられることを考慮に入れると，必ずしも非統語的な概念ということではないと言うことができる。また，センテンス・ルートという概念自体は一般認知能力，また語用論的動機の観点からも十分支持されている。たとえば下の（15）で挙げたいくつかの例［アイシェヌール : 2000］で示すように，トルコ語には（日本語でも見られるような）通常の表現に対応するような敬語表現が存在し，敬意の表現という動機によって動詞の語彙が異なることはその証拠の 1 つと考えられる。

(15) a. Lütfi Bey okul-umuz-a *teşrif* *et-ti.*
Lütfi 氏 学校-私たち-与格 訪問 する-過去：3 単
「Lütfi 氏が私たちの学校を訪問された」

b. Her şey-i Allah *ihsan* *ed-er.*
全て こと-対格 アッラー 寄付 する-アオリスト：3 単
「全てのものはアッラーがお与えくださる」

c. Oku-duğ-umuz şiir-i ban-a *lütfet-ti.*
読む-分詞-1 複 詩-対格 私-与格 恩恵を与える-過去：3 単
「彼（彼女）は私にその詩を読んでくださった」

なぜこれらの敬語表現がセンテンス・ルートの根拠となるのかについては説明の必要があるかもしれない。これまで，本稿では主要語と依存語との依存関係を自明のものとして説明してきたが，生成文法のように主要部の位置関係を「主要部前置型／後置型言語」といったような，（ある意味で）自動的なパラメータにより決定されるという説明方法を採用しない WG においては，2 つの語が統語的依存関係を有するとき，その関係が認められるには一定の根拠が必要となることは言うまでもない。主要語が依存語に対して有している特徴の一つに「依存語がどのような形式をとるかは主要語が決定する」というものがある。[13] たとえば英語の例では I like him. という文で，なぜ目的語が *he ではなく him となるのかは，この語の統語的主要語である動詞が決定していると考えることができるし，(13) のトルコ語の例でも，名詞 kitap が対格語尾を必要とし，kitabı という形式で具現化されるのはその主要語である動詞が要求するからであると考えるのは全く不自然ではないであろう。この主要語の特徴をセンテンス・ルートにも応用すると，(15) の各例で動詞の形式を決定するのは他のどの語でもなく，文脈を決定するコンテクストであるということが

13 この他［Hudson 1990: 106－107］では，主要語が依存語に対して有する特徴（プロパティ）が 6 点記されている。

できるはずである。別のいい方をすれば，センテンス・ルートは発話時のコンテクストをあらわすような（しかし具現化されない）ある概念に依存していると考えるのである。[14] このように考えることで，センテンス・ルートの理論的位置づけは解決すると WG では考える。

これに加えて，上述のような語用論的な動機付けとならび，センテンス・ルートはたとえ例外的に主要語が具体的にはあらわれていなくても，特質継承によって例外的事実は一般的特徴に優先される（通例どの語もかならず別の語に依存していなければならないが，センテンス・ルートは例外的に依存する語がなくてもよい）という理論的根拠を用いて例外性を正当化することができる。これは，たとえばペンギンが鳥の一種であるにもかかわらず,「飛行」を移動手段としないことを我々が認知する方法と並行して WG では説明する。つまり，WG では「特質継承」という概念を用いると本稿の冒頭で説明したが，この概念は，個々の具体例が特別な値をもっていればその値が優先されるが，そのような特殊な値がなければ，より一般的なカテゴリーから継承する（特質継承，インヘリタンス）ということで説明される。今のペンギンの例で言うならば，一般に鳥の移動手段は「飛行」であるが，このペンギンの「歩行」の特性はより具体的なカテゴリーである「ペンギン」がもつ「特別な値」であり，それ以外の特徴，たとえばクチバシを有し，また（退化はしていても）翼を持っているなどといった特徴はすべて，より一般的な「鳥」（または「鳥類」）というカテゴリーから継承されるということになる。センテンス・ルートについても，一般に語は全て上述した（9a）の Parent Valency の要請により主要語を必ず１つ有しなければならないが，センテンス・ルートは例外的に主要語が具現化されなくてもよく，この特別な値以外の諸特徴は全て一般的なカテゴリーである「語」から継承すると説明することができる。

最後に，（iii）の等位接続構造の批判に対しては，一般的認知能力の説明でよく知られている「エピソード記憶」（episodic memory）を利用した等位接続構造の統語的説明を行うことで問題を回避できる，としている。具体的には，エピソード記憶を形成する要因として，WG では人間が認識する行動の基本単位として「チャンク」（chunk，例えば「学校へ行く」,「机に座る」「鞄を開ける」等の各行動）と，チャンク同士がどのような順序をなしているかという「系列的順序付け」（serial ordering，各行動には順序があり，先ほどの例で言えば「学校へ行く」後に「机に座る」, その後「鞄を開ける」という順序を我々は理解している）の２つの概念を挙げている。この認知概念を言語的概念，つまり等位接続構造の説明に応用するならば，等位接続詞で連結されたものどうしがある種のチャンクを形成しており，その順序は系列的順序付けによって配列されていると考えることができる。すなわち，（14）の例でいえば，and で並列されている‘（to）Edinburgh yesterday’,

14 WG で仮定する言語知識のネットワークは，様々な概念がネットワークで構成されていると本稿の冒頭で述べたが，事実上統語論の中心単位となっている語も，概念の一種である。このように考えれば，究極的に言えば，ある語が依存するのはセンテンス・ルートかどうかを問わず常に何らかの概念であるということができる。この意味で，センテンス・ルートの主要語が具現化されないということも理論を全体的に見渡した時に整合性が全くないことにはならない。

‘(to) Birmingham on Thursday’ のそれぞれがチャンクを形成しており，両者は and によって並列している。これを WG の統語論の枠組みに置き換えれば，それぞれのチャンクのランドマークは and というわけである。以上のことは図 15 のように描き出すことができ，少なくとも等位接続構造が「ランドマーク他動律原理」でなければ説明が不可能であるということにはならない。[15]

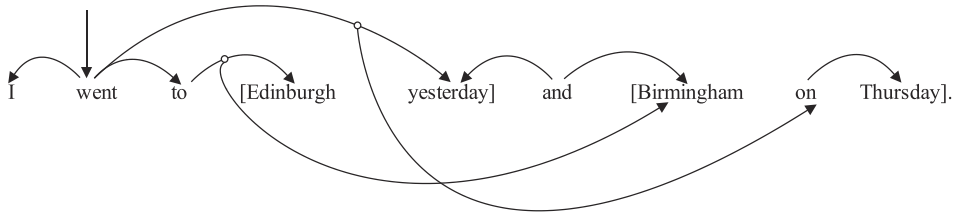


図 15

以上の理由が提示された結果，最新の WG の枠組みでは再び依存関係の交差禁止原理をはじめとする一連の原理が採用されることになったのであるが，いずれの枠組みを採用するかを考慮する際，実用性をその要因の一つとして挙げるのであれば，間違いなく本章で導入した枠組みの方が，視覚的に不連続構成素が適格な構造ではないことを表示できる点で優れていると言えるかもしれない。ただし，本稿で提示した等位接続構造についての議論にのみ関して言えば，理論的な簡潔性は［Hudson 2007］のほうが優れていると言うこともできる。ただ，［Hudson 2007］の枠組みでは，ランドマークが他動的に適用される性質上，実際の統語的依存関係が認められなくてもランドマーク関係にある語同士の組み合わせが存在するため（たとえば二重目的語構文における直接目的語と間接目的語はその典型例である），統語的依存関係をあらわす曲線の矢印とは別の形でランドマーク関係を表示しなければならないのに対し，最新の枠組みはランドマーク関係を並行して有する統語的依存関係と，ランドマーク関係を含まないものとを明確に区別して表示するという取り決めがあるため，統語構造を図示化する際に不必要な矢印の数を増やさなくて済むという利点がある。

（3） 応用

本項の冒頭で，連続性は言語共通に見られる傾向であると述べたが，一見してこれに対する反証となりうる様々な言語の実例が様々なところで提示されていると想像するのはそ

15 図 15 でも本稿の多くの図と同様に統語的依存関係のラベルを明記していないが，等位接続詞 and からチャンク（つまり，［Edinburgh yesterday］と［Birmingham on Thursday］）に向かっている矢印は単なるランドマーク関係であり，具体的な統語関係があるかどうかは明記していないことに注意する必要があるだろう。また，and のような等位接続詞は，WG の枠組みでは例外的に文中の他の語に依存しないが，同じく文中の他の語に依存しないセンテンス・ルートと異なり，不連続構成素を誤って予測することになる可能性を残すため，垂直の矢印は認めない。

れほど難しいことではない。たとえば，カルカトゥング語（Kalkatungu）の例で［Blake 1983］が提示した（16）のような例は，統語構造をどのように仮定するかで問題になるかもしれない。

（16） cipa-yi　　yanyi　　yaun-tu　　icayi　　tuku-yu
　　この-能格　　白人-能格　　大きい-能格　　噛む　　犬-能格
　　「この大きな犬がその白人を噛んだ」

（16）のような例が問題となるのは，和訳との対照からも明らかなように，連続して生起していることが期待されるはずの「この」「大きい」「犬」に相当する語が実際には連続していないということによる。もし，この意味関係をそのまま統語的依存関係に反映させるとすれば，確かに依存関係どうしが交差してしまうことになり，構文の文法性が正しく予測できないことになる。理論的枠組みによっては移動や変形などを用いて，（16）の構文の文法性を説明しようとするかもしれない。しかし，依存関係の枠組みでもこの構文が説明できないわけではない［Hudson 1999］。すなわち，能格標示されている名詞や形容詞に対して，格を与えているのは動詞である，つまりそれぞれの語は動詞に直接依存していると考えればよいのである。このことを反映し，［Hudson 1999］が説明しているように，図 16 の上部のような分析ではなく，下部のような依存関係を認めることができる。

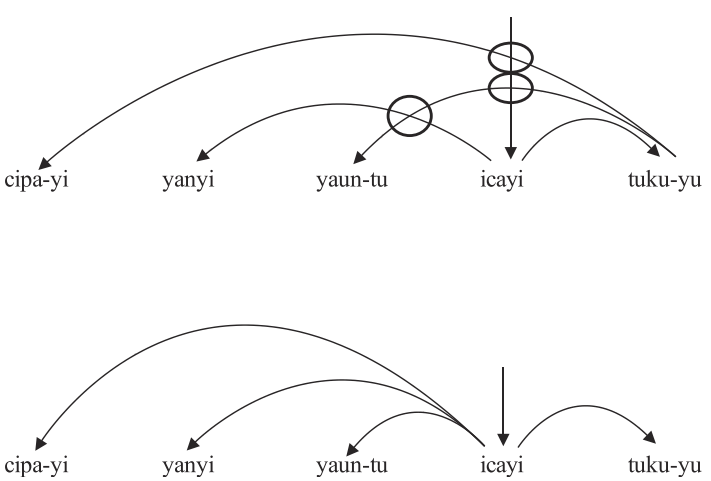


図 16

このような考えを応用し，トルコ語における例を最後に提示して，議論を終えることにしたい。本稿の冒頭で，限定形容詞は名詞に近接していなければならないことを（1）の例を提示して述べたが，（17）の例のように属格名詞が主要部名詞に依存していると考えると，その統語構造をどのように説明するかが問題となるかもしれない。すなわち，（1b）

（1c）のように形容詞と主要部名詞が連続していなければ文法的に不適格であるのに対し，（17b）（17c）のいずれも，（1b）（1c）などと比較すると，はるかに許容度が高い。

（17） a. Berna-nın　　kitab-ı-nı　　oku-du-m.
　　Berna-属格　　本-３単-対格　　読む-過去-１単
　　「私は Berna の本を読んだ」
　　b. Kitab-ı-nı　　oku-du-m　　Berna-nın.
　　本-３単-対格　　読む-過去-１単　　Berna-属格
　　「私は Berna の本を読んだ」
　　c. Berna-nın　　oku-du-m　　kitab-ı-nı.
　　Berna-属格　　読む-過去-１単　　本-３単-対格
　　「私は Berna の本を読んだ」

（1）と（17）との文法性の差の相違は，主要部名詞との一致関係の裏付けもあって，属格名詞のほうが，限定形容詞と比較してはるかに統語的独立性が高いことに起因するという［Kornfilt 2003］の指摘がある。もしこの説明が正しいとすれば，依存関係の枠組みでこのことを表示するのはそれほど困難なことではない［吉村 2008a］。すなわち，限定形容詞を統語的に支配するのは主要部名詞のみであるのに対し，属格名詞は主要部名詞だけでなく，文の述語にも統語的に依存しており，さらに属格名詞のランドマークとなるのは，主要部名詞ではなく文の述語であると考えればよいのである。以上のことは，図 17 のようにあらわすことができ，図 11 と比較すればその統語構造の違いは明らかである。[16]

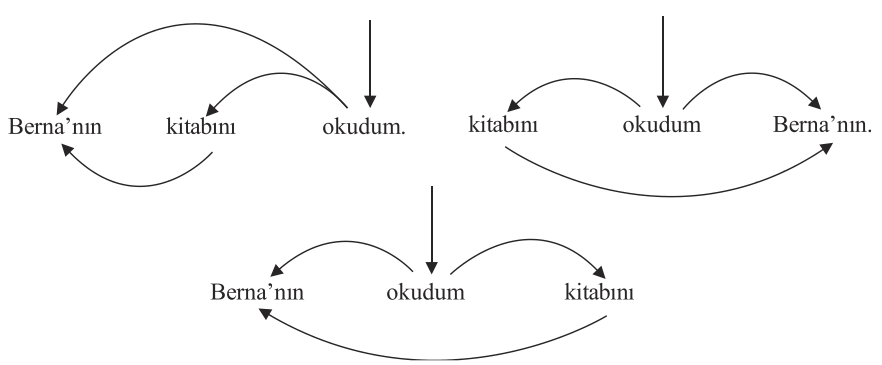


図 17

このように，一見して統語的に関係を有していることが明らかな一方で，不連続性を示

16　トルコ語における属格名詞の統語的独立性が高いとする根拠については，［吉村 : 2008a］を参照。また，属格名詞と，属格名詞が修飾する主要部名詞とが統語的に分離する現象については，［Hayasi 1997］に詳細なデータが提示されている。

す例はトルコ語だけでなく様々な言語に見られると思われる。それらのいわばやや複雑な構造をどのように説明するかが言語理論の如何を問わず問題となるのであるが，WG の枠組みはこれまで見てきたように移動や変形と言った操作を一切使わず，一般的認知能力に基づいて帰納的に導かれた原理を用いることにより，言語知識を正確に記述・説明することを試みている。本稿で与えられたデータに関する限り，WG の説明はひとまず成功していると思われる。

４．結語

本稿では語順の問題，特に不連続構成その排除の問題を，やや例文を限定しつつも最近の WG でどのように説明するかを論じ，この説明は本稿で提示したトルコ語の多くの例に対して，［Hudson 2007］で用いられた説明を導入するよりもはるかに簡潔性の面で優れていることを明らかにした。ただし，このことは決して［Hudson 2007］で提示されたモデルに理論上の問題があることを意味するのではない。どちらの枠組みにせよ，説明しようとしていることの本質は，統語的には語同士の配列は内心構造を有しているということであり，どちらの枠組みもその点では等価であると言えるであろう。

たとえば句構造，移動や変形に基づく理論をそのままの形で文法教育に応用することが相当困難であることが予想されることを考えると，視覚的に簡潔に構造の不適格性が表示できる点で，少なくとも実用面を考慮するならば，本稿で提示した枠組みはより適用しやすいモデルとなる可能性を秘めていると言えるだろう。もちろん，当然のことながら実用性と理論的優位性は全く別の問題であり，競合する様々な理論との様々な観点からの比較・検討は今後の重要な課題である。

＊本稿は大阪大学世界言語研究センター『民族紛争の背景に関する地政学的研究』プロジェクトによる研究成果の一部である。また，同時に科研費基盤研究（C）「New Word Grammar 理論（NWG）による英文法研究」（研究代表者：菅山謙正，課題番号 20520444）の支援を受けている。

本稿の内容の一部については，2010 年 5 月に開催された神戸言語学研究会（於：同志社大学）で口頭発表する機会を得た。有益な助言，コメントを下さった参加者の各位に感謝の意を表するが，とりわけ本稿の執筆に際して初期草稿の段階から有益な助言およびコメントをいただいた菅山謙正教授（京都府立大学），例文の判断をしていただいた 2 名のトルコ人インフォーマント，また草稿を査読していただき，有益なご指摘とご助言をくださった各氏に謝意を表する。査読者の各氏からのご指摘，ご助言等には十分配慮して加筆・修正を施したつもりであるが，それらが十分反映されていない部分があれば筆者の力量不足ということでご容赦いただきたい。また，上述で記した各氏のご協力にもかかわらず，本稿における過失の責任は全て筆者に帰することは言うまでもない。

（参照文献）

Blake, B. 1983, “Structure and Word-order in Kalkatungu: The Anatomy of a Flat Language”, *Australian Journal of Linguistics* 3, 143－75.

Erguvanlı, E., 1984, *The Function of Word Order in Turkish Grammar*, Berkeley: University of

California Press.
Kornfilt, J., 2003, “Scrambling, Subscrambling, and Case in Turkish”, In Karimi, S. (ed.). *Word Order and Scrambling*. Malden and Oxford: Blackwell. 125－155.
Hayasi, T., 1997, “Separated Genitive Construction in Modern Turkish”, in Matsumura, Kazuto and Hayasi, Tooru (eds.) *The Dative and Related Phenomena*. Tokyo: Hituzi Shobo. 227－253.
Hudson, R., 1984, *Word Grammar*. Oxford: Blackwell.
――1990, *English Word Grammar*. Oxford: Blackwell.
――1995, *Word Meaning. London*: Routledge.
――1998, *English Grammar*. London: Routledge.
――1999, “Discontinuity”, *Traitement Automatique des Langues* 41: 15－56.
――2007, *Language Networks: The New Word Grammar*, Oxford: Oxford University Press.
――to appear in 2010, *An Introduction to Word Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.
アイシェヌール, T., 2000,「トルコ語の敬語動詞についての基礎的研究」,『東京大学言語学論集』, 19, pp. 227－246.
吉村　大樹, 2008a,「トルコ語の属格名詞の独立性についての考察－ Word Grammar による分析－」, *KLS* 28, pp. 141－151.
――2008b,「トルコ語とウズベク語の疑問接語 mI/mi は文法的に異質か」, 日本言語学会第 137 回大会口頭発表論文 .
――(印刷中)「最近の Word Grammar について」, 菅山　謙正（編著）『ハドソンの英文法』, 東京：開拓社 .
Yoshimura, T., to appear in 2010, “Syntactic Independence of the Genitive Noun and the Position of the Interrogative Clitic in Turkish: A Word Grammar Account”, In Sugayama K. (ed.) *Kyoto Working Papers on English and General Linguistics*, Tokyo: Kaitakusha.
――In preparation, *The grammatical Behaviour of the Interrogative Clitic in Turkish and Word Grammar*.

（2010. 06. 16 受理）